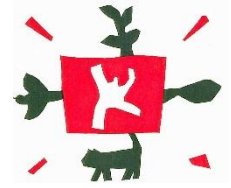


公同通信



2026年10月25日 361号(571号)

日本基督教団 西宮公同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email koudou@gamma.ocn.ne.jp

<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

To tell the story 260

説教「イエスの納税問題」

マタイによる福音書第22章15～22節

15: それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、罠にかけようかと相談した。

16: そして、その弟子たちをヘロデ派の人々と一緒にイエスのところに遣わして尋ねさせた。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです。

17: ところで、どうお思いでしょうか、お教えてください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」

18: イエスは彼らの悪意に気づいて言われた。「偽善者たち、なぜ、わたしを試そうとするのか。

19: 税金に納めるお金を見せなさい。」

彼らがデナリオン銀貨を持って来ると

20: イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた

21: 彼らは、「皇帝のものです」と言った。すると、イエスは言われた。「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」

22: 彼らはこれを聞いて驚き、イエスをその場に残して立ち去った。

説教

「カエサルのはカエサルに、神のものは神に」

これはたいへん有名なことばです。

「ああ、カエサルのも、つまり権力者のものは、権力者のものであって、神様のものは神様のもの、つまり世俗的なものごとと信仰的なものごとは、別々の世界、ということか」・・・そういう受

け取り方をするかぎり、イエスの言葉は骨抜きにされて、なんの力も持ちません。この世の出来事と、神への信仰とは、お互いに邪魔することなく、交わることもなく、すれちがうだけです。

しかし「皇帝のものは皇帝に、特に、**神のものは神に返しなさい**」という言葉、を、今一度、注意深く聞くならば、それは私たち現代人の常識をゆさぶる言葉、あたりまえの日常を覆す言葉となります。そうでなければ、私たちはイエスの言葉の前を素通りしてしまったことになります。

冒頭に登場するファリサイ派は、イエスに敵対する、ユダヤ人の支配者層です。しかしこのファリサイ派は今、どこか見えない舞台裏へしりぞいて、姿を隠しています。そして彼らは、自分自身はイエスのところには赴かず、目立たないように、代わりに弟子たちを派遣してきます。

ここでファリサイ派とともに現れた「ヘロデ派」という人々は、ユダヤ人のヘロデ王（朝）の支持者たちのことです。このヘロデ派は、福音書の中では、ほんの時折登場するだけで、あまり存在感がありません。（*1）ヘロデ派は、ローマ帝国のユダヤ人に対する支配に従いつつも、その一方で、ローマ帝国からの独立を志向するという、屈折した、あいまいな姿勢を持つ人々です。彼らはファリサイ派と仲が良く、後にキリスト教徒と対立するようになる人々です。

さて、彼らはイエスにこう語りかけます。「先生、わたしたちは、あなたが真

実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。」

彼らのイエスに対する語りかけは、まず相手をほめて、持ち上げて、それによって相手の好意をひきつけようとする、巧みな語りかけです。

しかし、イエスに対する「先生」という語りかけ方は、じつは（マタイ福音書では）、イエスの本当の弟子たちの言葉づかいではありません。これは、イエスに敵対する者たちに特有な言葉づかいです。彼らは本心では、イエスのことを「先生」などとはみなしていません。彼らのへりくだり方は、毒を含んだ賛美です。

さらに彼らは、イエスが「人々を分け隔てなさない」ということによって、イエスの口をわらせよう、時の権力者であるローマ皇帝についても、本当のことを言わせよう、と仕掛けているように見えます。しかも彼らは、自分自身の意見を表明しようとしません。つまりイエスと対等な立場で論争をしようというのではなく、イエスから教えを請うふりをして、イエスを何とか陥れることを狙っているわけです。

彼らがイエスに投げかけた問いは、「皇帝に税金を納めるのは、律法に合っているか、合っていないか？」というものです。

税金・徴税は、国家の重要な本質です。徴税というしくみに、国家権力の本質があらわれています。

国家という仕組みは、一見どんなにおだやかに見えても、権力によって、いいかえれば武力によって、人々を支配し、黙らせる仕組みです。たとえそのような暴力が目に見えなくても、いざというときには、暴力、力づくで人々を支配する仕組みです。国家は他の国家に対して、武力、戦争という形で、その本性をあらわします。国内においては、国家権力に逆らう者を処罰します。

しかし、ただたんに武力を用いて人々を力づくで支配するのでは、その支配は長続きしません。人々にその支配を受け入れさせて、長期間にわたって服従させることが必要です。そこで国家は、人々から税を徴収し、それを人々に再分配することによって、人々の生活を保護します。たとえば道路をつくったり、水道をつくったり、福祉をほどこしたり、治安を維持したり、他の国家からの侵略をふせいだります。このように、国家は被支配者から税金を取るだけではなく、それを被支配者にある程度還元します。

この税制がうまくいかない時、国家は危機に瀕します。かつてダヴィデ王によって建国されたイスラエルが、その後に南北に分裂したのも、重すぎる税が一つの原因でした。さらに南北に分裂した二つの王国は(北王国も南王国も)どちらも超大国の支配下に下り、その超大国に対して重い税を払わなければならなくなりました

それゆえに、ユダヤ人の歴史の中で、支配者に対してこれ以上税を納めまいと

いう、抵抗運動も繰り返し起きました。支配者に対して税をおさめないということは、独立運動です。

さらに新約聖書の時代、つまりイエスやパウロの生きた時代、ユダヤ民族を支配する最大の権力は、ローマ帝国でした。ローマ帝国は、その広大な領土の、すべての男性・女性、奴隷のうち、12歳もしくは14歳から65歳までの人間すべてから、人頭税を徴収しました。それが、今日のテキストに登場する、銀貨のデナリオンです。紀元6年以来、ローマ帝国の属州であるユダヤ州に、課税が行われるようになりました。

貨幣は、国家の権力そのものを体現しています。皇帝が、言い換えれば国家権力が、貨幣の値打ちを保証します。皇帝が支配する範囲、帝国のテリトリーとは、つまるところ、その皇帝が値打ちを保証する通貨が流通する範囲、テリトリーです。

その銀貨にはラテン語で「皇帝ティベリウス、神のアウグストスの、いと高き息子、最高の祭司」というような言葉が刻まれていました。



皇帝アウグストスの名前は、聖書にも登場します。アウグストスは、イエスが生まれたときの統治者であり、ルカ福音

書のクリスマスの物語に名前が出てきます。

皇太子の誕生は、ローマ帝国において、喜ばしい知らせ、エヴァンゲリオン、つまり「福音」と呼ばれました。しかし、ローマ帝国の片隅で、イエスキリストがひっそりと誕生したことこそが、本当の「福音」である—これが聖書の福音書の主張です。神と等しく崇められた皇帝アウグストゥスに匹敵する、いやそれを上回る、まったく新しい神の子が生まれた、というのが、聖書のメッセージ、福音書のメッセージです。

さて、その皇帝アウグストゥスの息子であり後継者である人物が、ティベリウスです。そのティベリウス皇帝が、政治的にも宗教的にも、この世の最高の統治者である、というのが、彼自身が鑄造したデナリオン銀貨に刻まれ、帝国全土に流通するメッセージです。

そのメッセージは、「皇帝ティベリウス、神のアウグストゥスのいと高き息子、最高の祭司」と、銀貨に刻まれています。

しかしユダヤ人から見れば、この銀貨は、二重の意味で、自らの信ずる神に対する冒瀆でしかありません。皇帝を神とすることはもちろん、神の姿を目に見える偶像として銀貨に刻み付けることは、あの十戒の戒めに完全に反することです。モーセが神から授かった十戒には「わたしのほかに何者をも神としてはならない」、「目に見える偶像を刻んではならない」と書かれているからです。

したがってローマ皇帝への納税は、ユ

ダヤ人にとって政治的な問題であると同時に、宗教的な問題でもありました。旧約聖書の伝統が語り伝えてきた、唯一なる神への服従と、地上の権力者であるローマ皇帝への納税は、どのように折り合いがつくのか。これは深刻な問題でした。

信仰と納税は両立しないと考えて、納税に反対するユダヤ人がいました。これが「ゼロータイ」、あるいは「熱心党」と呼ばれる先鋭的な結社です。イエスの弟子にも、この「熱心党」のメンバーがいました。のちにイエスを裏切ることになる、あのイスカリオテのユダも、この「ゼロータイ」、「熱心党」の一人であったという説があります。「熱心党」という名前があらわす通り、彼らは、神の支配を妨げる者に対しては、命がけで戦うという狂信的情熱をもった人々です。じっさい、この熱心党の中には、ローマ帝国に対する暴動をひきおこして、イエスよりも先に十字架にかけられて処刑された者もいます。ユダヤ人の反乱が続発し、ローマ帝国はそれを鎮圧するために、十字架による処刑を行ったのです。当時十字架にかけられたのは、イエスキリストだけではありません。それほどにまで、ローマ帝国の支配は、ユダヤ人を苦しめ、抵抗運動を呼び覚ましたということです。イエスが生まれ育ち活動した時代は、そのような騒然とした時代でした。

しかし、ユダヤ人の誰もが、このように徹底的な抵抗を行ったわけではありません。パリサイ派は、税金が重いと感じつつ、これを支払うことを承諾していま

した。あのパウロも後に、納税問題に頭を悩ませつつ、結局納税を肯定しています。(ロマ書 13)

いずれにせよ、ローマ帝国からの重税はユダヤ人を苦しめ、独立か服従かを迫る、ユダヤ人の運命にかかわる問題でした。ファリサイ派がイエスに突き付けた問題も、つまるところこの問題です。

「ローマ帝国の命令通りに、人頭税を払い続けるべきか、やめるべきか？」という問いです。

しかし「人頭税を払い続けるべきか、そうではないか？」という問いかけ自体が、一種の罠となっています。「皇帝に税金を納めるのは、ユダヤの律法に合っているか、それとも合っていないか？」という問いは、「イエス」か「ノー」か、どちらかで答えよ、とを迫ってきます。

A もし「然り、Yes、皇帝に税を納めるべきだ」と答えるならば、どうなるのでしょうか？ それはユダヤ人の伝統的信仰、神への服従を否定することになります。さらに、ローマからの重税に苦しむ民衆の敵となることを意味します。福音書を読むと、これまで群衆は、イエスの味方に付いています。そのためにファリサイ派の人々は、群衆を恐れてイエスを捕まえることができないでいます(21,46)。しかし、ここでもイエスが納税に賛成すれば、その発言を利用して、イエスとユダヤの民衆を仲違いさせることもできるかもしれません。

B しかし、これとは逆に「否、No、皇

帝に税を納めるべきではない」と答えるならば、どうなるのでしょうか？それはイエスがローマ帝国への税を否定する、反逆者であることを証明します。ローマの執政官であるポンテオ・ピラトのところにイエスを訴え出ることができるわけです。

つまり、イエスがどのように答えても—然りと答えても否と答えても—それによってイエスを不利な状況へと陥れることができるわけです。

イエスは彼らが教えを請おうとしているわけではないことを見抜きます。

「銀貨を見せてみよ」というイエスの要求によって、それは一瞬で明らかになります。彼らが神殿でデナリオン銀貨を持っているということは、彼らは自ら納税していることを示しています。彼らは神殿で、すでに「皇帝のものを皇帝に」おさめています。したがって、彼らがイエスに投げかけた質問は、じつは何ら真剣な質問ではなく、イエスの言葉じりをとらえるためだけのものだったことがわかります。

イエスは「然り」とも「否」とも答えません。「皇帝のものは皇帝に、**神のものは神に返しなさい**。」と答えました。

これは、個々人に対して、一種の決断をせまる答えです。しかも、一見、納税の正当性をめぐって話しているように見えますが、これは税金の問題だけにはとどまりません。アクセントは後半の「神のものは神に返しなさい」ということにあります。

イエスがここで取っている立場は、納税をストレートに認めているファリサイ派とも、納税をストレートに拒否する熱心党とも、異なっています。イエスはローマ帝国の権威に対しても、ユダヤ民族の権威に対しても、妥協することなく毅然と対峙しています。両方の権威から迫害されて、やがて十字架刑へと至る予兆が、ここにあります。

イエスが言わんとすることは、今ここにおとずれようとしている「神の国」のほうで、ローマ帝国の支配より決定的に重要だ、ということです。到来する神の権威は、既存の皇帝の権威よりも大きい、ということです。皇帝の権力は過ぎ去りゆくが、神の支配は永遠に続く、ということです。

「神のものを神に返せ」とは、「神のものを、自らを神格化・絶対化する支配者の悪用にゆずりわたすな」という要求です。

福音書の中には、あなたがたは神と富との両方につかえることはできない、というイエスの言葉もあります。さらに、不正な富であっても、それを神の意志になんて用いよと勧める、イエスの言葉もあります。

それでは、神に帰すべき、神のものは、具体的にいったい何を指しているのでしょうか。イエスはそれをはっきりと語ってはいません。イエスの言葉を聞く者が、「神のもの」とは何であるかを、その都度判断し、決断し、選び取るように求めているともいえます。

しかし、ここであえて一つ、推論を試みます。皇帝ティベリウスがデナリオン銀貨にきざみつけたのは、皇帝自身の姿、皇帝の似姿でした。それでは、聖書において、神が自らの姿をきざみつけたものとは、いったい何でしょう？それは、いうまでもなく人間です。神が自らに似せて人間をかたどった、という天地創造の物語は、聖書全体の人間観の土台をなしています。

神のもの、神にお返しすべきものとは、この、神の似姿である人間そのもののだと言えないでしょうか。だとすれば、イエスの戒めは、人間を、神の尊厳が刻みつけられたもの、神の栄光が映し出されたものとして、ふさわしく扱え、という戒めになります。

私はここで、18 世紀の偉大な哲学者のイマヌエル・カントの言葉を思い出します。それはカントの定言命法と呼ばれる、有名な戒めです。定言命法とは「人間を自由な存在として扱え」という戒め、「人間を単なる手段としてではなく、目的として扱え」という道徳です。

貨幣と違って、人間は交換することができない一回的な存在、代替不可能な存在です。人間を、他者を、神の尊厳が刻み込まれた存在として、扱え。人間をモノ扱い、道具扱いするなかれ、単なる金銭価値に還元するなかれ。もしそのような人間を扱う権力者がいたらば、そのような権力者に人間をゆずりわたすな、ということです。

それは、隣人を自分のように愛せよと

いう、キリスト教の隣人愛の戒めと、あい通じるものがあります。哲学者カントの定言命法も、イエスのメッセージも、この世の既存の仕組みや体制に対する、徹底的な深い批判を含んでいます。

果たして今の国家は、神のものを神に帰す国家だといえるでしょうか？人間を神の似姿として尊重する社会でしょうか？いやそれどころか、人間を貨幣と同様に交換可能なもの、使い捨て可能なものとする社会に、いよいよなりつつあるのではないのでしょうか？

そもそも私たちが知っているような国家、とりわけ国民国家（英語で **national state** といいます）という仕組みは、たかだか数百年の歴史しかありません。日本国家にいたっては、明治維新における国家統一以来、わずか **150 年**の歴史しかありません。しかも人類の歴史の中で、滅びなかった国家、統治機構はひとつもありません。ローマ帝国もまた、そのように滅んでいった歴史上の無数の国々の中の一つにすぎません。

まして、地上に存在する国家が、イエスの説く「神の国」ではないことは言うまでもありません。そして国家がほろびても、そのあとに「神の国」が実現するという何の保証もありません。もっと悪い国家が現れるかもしれません。

しかも国家は、そう簡単には消滅しません。存続の危機に瀕すれば、死にもの狂いで延命をはかります。つまり、民主主義の原則も投げ捨てて、平和主義の原則も投げ捨てます。先ほども述べたよう

に、国家権力が実は武力・暴力によって成り立っているという隠れた本性をむきだしにして、死にもの狂いで延命を図るはずで。それが今、私たちの目の前で起きている、この国の姿ではないでしょうか。

しかし私たちは、どんな悲惨な状況においても、あきらめる必要はありません。神の国はどこか理想の彼方にあるのではない。イマココで、起きつつある、イマココで私たちに絶えず語りかけ、はたらきかけ、変革を迫る出来事、生きた力です。

「神のものを神にふさわしく返せ。」
「神の似姿である人間を、その似姿であることにふさわしく扱え、人間の尊厳をとりもどすような社会をつくれ。」

そのような仕方で、イエス・キリストの言葉は、私たちに語りかけてくことをやめません。たとえその声が、私たちの社会で、どれほどかき消されるかのように見えても、その言葉は決してやむことがありません。

預言者イザヤが「草は枯れて花はしばむが、神のことばはとこしえに立つ」と言うとおりです。イエスキリストが「わたしは世の終わりまでいつもあなたがたとともにいる」と言う通りです。皇帝の権力は過ぎ去れど、神の働きかけは決してやむことがない、ということです。そこに私たちの希望があります。

（＊1）マタイではこの箇所のみ。その他はマルコ 3,6; 12,13 にしか出てこない。

（福嶋 揚）

今月の畑だより

最初に咲いた彼岸花が、9月中旬、10月になっても、何本かの彼岸花が咲いています。

彼岸花が咲き始める頃、青じその穂にも、小さな白い花が咲き始めていました。その花が終わり、穂じそ摘みが始まります。以前は、枝を切って持ち帰り、しその実をしごき取っていましたが、今年は畑で、枝についたままの実をしごいて摘み取ることにになりました。先端からだ、実は落ちやすいのですが、途中でプツツと切れてしまうことが多いので、枝の付け根のあたりから、丁寧に、1本ずつしごいて、まだ緑色の苞（ほう）のまま実を摘み取ります。これが、時期が遅れてしまうと、はじけて実が飛び出してしまいます。

こうして摘み取ったしその実が、子どもたちから大人まで、後川の炊きたての新米に乗付けて「おいしい」と言ってもらう「しそ味噌」になっています。

お借りしている幼稚園の畑の主役は、春は「イチゴ」、秋は「さつまいも」と決まっています。そのイチゴの苗、さつまいもの苗も、ホームセンターなどで手に入りますが、最近はインターネットでも入手が可能で、10月10日（土）、11日（日）に「さつまいも掘り」をした苗は、インターネットで探したもので、届いたものは埼玉県産でした。

そのさつまいもの草拔きは、園芸サークルの人たちの働きでも、十分とはいか

ず、草の中でつるをぐんぐんと伸ばしていました。

で、「どうかな…」と思っていた10日、11日の「さつまいも掘り」では、そこそこ大きいものもあり、一つの芋苗に、7～8個のさつまいもが付いていたりにして、集まった人たち、子どもたちにも、楽しい楽しい「さつまいも掘り」になりました。

農薬や化学肥料を使わずに（と言っても使っている油かす、鶏糞などには、少なからず薬品的なものは多少残留しているはず）、お日さまと、雨と大地が、一日一日の営みで育ててくれた食べものたち、それが、青じそ、しその実、しそ味噌だったり、さつまいもだったりします。

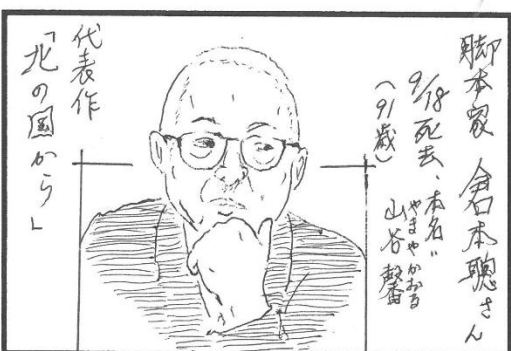
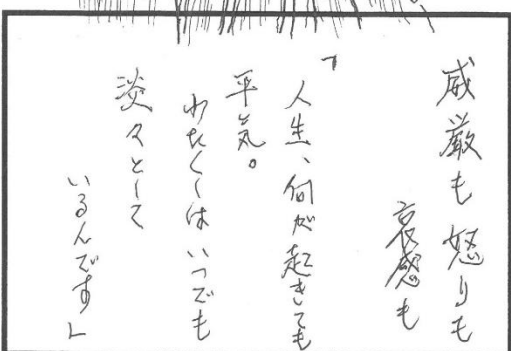
11月になると、その畑を耕して、たまねぎの苗を植えることになります。



未ム は



貧 幸 (ひんこう)



9月29日 朝日新聞/10月2日 神戸新聞引用

あんなこと こんなこと

2026年9月18日(金)

関西神学塾

福岡 楊さん

西宮公会堂 集会室

福岡さんをお迎えしての連続講座も、今回で5回目となりました。

ハンス・キュンクの生涯をたどるお話は、全体の半分を少し超えたあたりまで進みました。世界各地を飛び回りさまざまなものを見て、聞いて、感じながら、多くのことを自身の中に取り込んでいったキュンク。その歩みを、今回も興味深くお話いただきました。

次回ははいよいよ、ハンス・キュンクの生涯のクライマックスへ。「一番楽しいお話になるでしょう」とのことです。

次回は、来年3月ごろを予定しています。今から楽しみです。



2026年9月24日(木)

彼岸花

伏原町の畑

伏原町の畑の彼岸花が、満開です！ここ何年かは、少しずつ時期をずらして咲いていた彼岸花。今年は久しぶりに、一斉に咲きました！畑いっぱい広がる真っ赤な彼岸花、とってもきれいです。そして、次のお楽しみは、大きなお苗が育っているかな？

秋の楽しみが、まだまだいっぱい幼稚園の畑です。



2026年9月26日(土)

稲刈り

丹波篠山市 後川

みんなで稲刈りにでかけてきました。前日からの雨予報で、準備のことや田んぼの具合など、気になることも多かったのですが、当日の朝はなんとか雨にも合わず、元気に出発！後川に着くころには小雨が降り始めましたが、子どもたちはそんなことは構いなし。田んぼの中を走り回り、元気いっぱい！金色に輝く稲穂を、一束ずつ鎌で刈っていきます。ザクザクッと刈っては束ね、みんなでトラックまで運びました。たくさん働いたあとのお昼ご飯は、炊きたての新米とあたたかい汁物。おいしいご飯をたっぷりいただいて、またまた元気いっぱい！雨の日ならではの田んぼも楽しみながら、雨も吹き飛ばすような、にぎやかで楽しい稲刈りの一日となりました。



2026年10月10日(土)10時～11時ごろ

さつまいも掘り

伏原町の畑

さつまいも掘りをしました。大人たちが、大きな葉っぱのついたつるをめくって、お芋を見つけやすいように、スコップで少しずつ土を掘り起こしてくださいました。軍手をつけた子どもたちは、土の中からちらっと顔をのぞかせたサツマイモを見つけると、駆け寄って夢中で掘り出します。つるに繋がったお芋が次々と出てくると、みんな大喜び。畑のカマキリやバッタ、カエルたちも、賑やかな声にびっくり。青空の下、心地よい秋の風に吹かれながら、少し汗をかいて、収穫の喜びを楽しみました。



分からない、それでも他人事にはしない

今年7月、私たちの学校は、校舎の漏水という思いがけない出来事に見舞われました（恥ずかしながら…）。建物が使用できなくなり、現在は別の場所をお借りして、いわゆる間借りの状態で学校運営を続けています。突然の出来事に戸惑い、先の見通しが立たない中で、学生や教職員の皆さんにも大きな負担をかけることになりました。それでも、多くの方々にご協力いただき、何とか授業を再開することができました。支えてくださった皆さんには、心から感謝しています。

一方で、今回の出来事を通して、少し寂しさを感じることもありました。同じ法人の中でも、声をかけてくださる方がいる一方で、そうではない方もいます。法人は複数の学校を持っており、情報もすべて共有されている訳ではありませんし、もちろん、それぞれに事情があるでしょうから、すべての人に同じような対応を求めるつもりはありません。また、声をかけていただくことだけが支援ではないことも分かっています。それでも、当事者となった自分としては、同じ法人で働く仲間から、もう少し気にかけてもらえたら、という思いがあったのも事実です。

こうした思いを抱く一方で、ふと、自分自身のことも考えました。これまで私は、誰かが困難な状況に置かれているとき、その人のことをどれほど気にかけてきたらうか。困っている人がいること

を知りながら、何もできないまま、あるいは何もせずに、その場を通り過ぎてきたこともあったのではないのでしょうか。もしかすると、自分も誰かに対して、今回自分が感じたような寂しさを与えてきたのかもしれませんが。そう考えると、今回の出来事を通して感じたことは、決して他人事ではないように思います。

以前、今回の状況を法人内で説明する際に、「今、私たちは避難民のようなものです」と表現したことがありました。校舎を失い、慣れない場所で授業・業務を続けなければならない状況を、何とか伝えようとした言葉でした。実際、これまで当たり前に使っていた場所を失い、日々の業務を進めるにもさまざまな不便が生じています。しかし、後になって、その表現について考えることがありました。実際に住む場所を失い、これからの生活の見通しも立たないまま避難生活を送っている人たちと、私たちの状況が同じであるはずはありません。自分たちの大変さを伝えたいという思いがあったとはいえ、安易にそのような言葉を使ってしまったことには、少し反省が残りました。

日本各地では、地震や豪雨などによって、住み慣れた家を離れ、避難所での生活を余儀なくされる方々がいます。災害が起きた直後の混乱だけでなく、その後も続く不自由な生活や、いつ元の暮らしに戻れるのか分からない不安を思うと、胸が痛みます。ニュースなどで避難所の様子を見るたびに、もし自分が同じ立場

になったら、と考えることがあります。しかし、実際にその状況に置かれたとき、自分が何を感じ、どのような思いで日々を過ごすのか、簡単に想像できるものではありません。映像や報道を通して知ることと、実際にその場で生活することとの間には、大きな隔たりがあるように思えます。

海外に目を向ければ、戦争や紛争によって故郷を追われ、家族や友人と離れ離れになり、先の見えない生活を送っている人たちもいます。生まれ育った場所を離れざるを得ない人、家族の安否さえ分からない人、これまで築いてきた生活を突然失った人。それぞれに異なる事情や背景があり、その苦しみも一人ひとり違うはずです。そうした人々の姿を目にすると、何かできることはないだろうかと思えます。しかし、日々の生活に戻れば、いつの間にかそのことを忘れてしまう自分もいます。遠く離れた場所で起きている出来事を、どこまで自分のこととして考えられるのか。そうしたことを考えると、何とも言えないもどかしさを感じます。

「自分事として考える」という言葉を、よく耳にします。相手の立場に立って考えることは大切ですし、私自身もそうありたいと思っています。しかし、今回の経験を通して、他者の置かれた状況を自分のこととして考えることには、やはり限界があるのではないかと感じるようになりました。自分が経験していないことを、どれほど想像しても、当事者の思い

や苦しみをすべて理解することはできません。想像すること自体はできても、それが実際にその人の感じていることと同じであるとは限らないからです。

それでも、分からないことを理由に、関心を持たなくてよいということにはならないとも思います。相手のことを十分に理解できなくても、話を聞くことはできますし、何かを尋ねることもできます。ただ、関心を持つことと、実際に相手のために何かをすることの間には、思っている以上に距離があるようにも感じます。自分の生活や仕事に追われていると、目の前にいる人のことさえ、十分に気にかけることがありません。まして、遠く離れた場所にいる人々のことを、いつも心に留めておくのは簡単ではありません。そうした自分の姿を思い返すと、誰かの痛みについて簡単に語ることに、ためらいを覚えます。

聖書には、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」という言葉があります。

この言葉を読むと、私は少し考え込んでしまいます。誰かの苦しみを、自分のことのように受け止めることは、決して簡単ではありません。今回の漏水のことを通して、私自身も周囲の人たちの反応に寂しさを感じましたが、一方で、これまで自分も誰かの苦しみに十分に目を向けてこなかったのではないかと思うこともあります。そう考えると、この言葉を前にして、誰かに何かを語るというよりも、まずは自分自身のことを振り返らず

にはいられません。

今回の出来事を経験したからといって、他者の苦しみ分かるようになったわけではありません。また、これからは誰に対しても十分に向き合えるという自信があるわけでもありません。自分が感じた寂しさも、自分自身への反省も、どちらか一方だけで片づけられるものではないように思います。寂しいと感じたことは事実ですし、自分にも至らないところがあったのではないかという思いも、また事実です。どちらかを打ち消すのではなく、今はその両方を抱えています。

誰かの痛みをどこまで理解できるのか。そして、分からないまま、どのように向き合っていけばよいのか。今のところ、私には明確な答えがありません。今回の経験によって、何かが大きく変わったとも言いきれませんが、これから自分がどう行動していくのかも、まだはっきりとは分かりません。ただ、分からないからといって、そこで考えることをやめてしまうのではなく、今回の経験を通して生まれた問いを、これからも心に留めておきたいと思います。

(古谷 佳之)



龍のひげ

福島東電の事故 そこから考える

小豆川さんは測り続けています ③
放射能を知ることが大切です

私の話を聞いてください

～小豆川さんの話の続きです

一番、良くないのはこういう例だと思います。

だいぶ以前の話です。イチエフの 5 号機と 6 号機のタービン建屋中の水。「これ大丈夫なんだよ」という政府側の説明に対して、取材にきていた記者の方が、「安全だっていうんだったら飲んでみよ」と言葉を投げました。けしかけられて当時の政務官が、「じゃ、飲んでやるよ」とその水を飲んでしまったんですね。売り言葉に買い言葉みたいな感じで実際に飲んでやったっていうコミュニケーション。これは僕は、完全に失敗していると思います。やっぱり人をわざと被曝させて、安全性を証明するなんていうやり方は、ちょっとセンスがないなと個人的には思います。

やっぱり 最低限必要なことは何かって言ったら放射性物質の一般的な知識を共有することが大事です。

加えてどうしても時間軸の概念が必要になります。物理的な半減期で放射能は確実に減っていくことに加えて、放射性物質の粒は、雨や風に乗ってどんどんと移動していきます。食物連鎖でも移動していきます。どれだけ雨が降るのか、どれほどそこを除染したのかっていうこと

にも変わっていきます。私たち人間社会の中でも世代交代ですよ。子供や孫になった時にどう思ってた話もありますし、時の政権によって考え方も変わってきます。法律もきっと変わってくるはずですよ。

何より人体の影響っていうのはその場の急性的な影響でない限り、慢性的なものだとしていつ出てくるかよう分らないということもあります。

だとしたらやっぱりその複数のパラメーターがある時間軸の中で大事なのはコツコツと考え続けることなんじゃないかなというふうに私は思います。

今、私がやっていることは何かと言うと、魚の中に放射性物質がどうやって含まれているのかってことを測ってみたり、極力、農作物の中にセシウムが移行しないようにするためにはどうしたらいいかと工夫を試みたり、そういうことを主に海外の皆さんと一緒に研究を続けています。

特に、チェルノブイリを経験したヨーロッパの方々は、ものすごく一生懸命協力してくれます。そういった方々と少しでも良い環境を作れるように取り組んでいます、

国内に関して言えばやっぱり放射性物質について普通に話せる環境を作っていく。そのためには教育ってのが大事だなと考えています。普段から福島県内を中心に、子供たちに放射能はこんなものなんだよ、とお話ししています。

オファーさえいただければどこにでも

行きますので、時間の許す限り行きますので、もしお孫さんとかお子さんですとか、あるいは、もう近所の学校でも何でもいいんです。放射性物質のことを、学校で話させてほしいのです。お気軽に私にお申しつけいただければと思います。

セシウム 137 の半減期は 30 年
～時間軸が大切

小豆川さんは、原発事故の解決を次の世代に託そうとしています。この課題は時間軸でしか解決しません。今、環境中に残存して影響を与えている放射性物質は、セシウム 137 です。事故前の環境に戻るには 300 年という時間を要します。少なくとも私たちは、この放射性物質と共生するしかないのです。

私たちの環境には、放射線が満ち溢れています。まず宇宙から放射線が降りそそいでいます。それを遮蔽してくれているのが大気圏です。だから飛行機での移動は被曝リスクは高まります。食べ物に含まれるカリウム。そのうち放射線を出すカリウム 40 が 0.01%含まれています。体重 60 キロで 4000 ベクレルの放射性物質をため込んでいるとされています。私たちの居住空間に使われているコンクリート。コンクリートは、密度が高いためガンマ線、中性子線、X線の遮蔽効果は高いとされています。一方、微量の放射性物質、気体のラドン（ラジウムが壊変したもの）を発生させます。

医療現場では、放射線が活用されています。レントゲンはなくしてはならない医

療技術です。ガン治療に使われる放射線医療は、幅広く応用されています。

環境中には、重金属、化学物質など人類にとって危ない物質に満ちています。日々使う家電製品、PC からは電磁場が発生しています。電磁場からは電磁波が放射されています。放射線物質から飛び出る放射線も電磁波の仲間です。この電磁波は電離放射線です。この作用が人体に悪影響を与えるわけです。さらに事故や戦争。そんな人為的なリスク、自然災害にさらされながら人類は、その命をつないできたのです。

放射性物質。少なくとも今、福島県の被災地を中心にして存在するのはセシウム 137 です。これは、間違いなく原発事故由来です。私たちの文明、私たち自身が生み出した毒物です。

何度も繰り返しますが、この災厄の責任は、先ず東京電力。そして原発を政策として推し進めた国にあります。日本という国は、民主主義の国とされています。政治が変われば、原発も止められる、らしいです。

原発に頼らない生活は、難しいのでしょうか？ 一説によると今、原発を全廃すると半世紀前の生活に戻るらしいです。原発事故からしばらく全原発が稼働していない時期がありました。生活に不便があったのでしょうか？

半世紀前に戻るのが嫌なら再生エネルギーを活用するというのも一つの有効な方策とされています。

今、風力発電から発生する低周波音の

被害が問題になっています。これは、円筒形の風力発電を使うとその発生をかなり低減できるようです。それでもいろいろな問題は生じます。今、被災地に広がるのは、放射性物質に汚染された農地を覆う太陽光発電パネル。汚染された農地で営農するより、収入になるわけです。国の政策(=科学技術)は私たちをどんどん農業を忘れさせ、土と切り離そうとしています。

今年もノーベル賞の季節を迎えました。もその様子を見ていると科学技術というものは、お金を儲けるためのものだということがよくわかります。

私たちの生活の隅々にまで浸透したお金(=資本)とどう折り合いをつけるのか。その先に原発なしの世の中が見えてくるのかもしれませんが。

(四方 哲)

※ロシナンテ社では、福島は今、原発問題について、PDF 版「ロシナンテ通信」をインターネット配信しています。

年間購読代 3600 円 お申込みをよろしくお願いいたします。shikatasatoshi@gmail.com



カサブランカ

～♪ぼくのみる空と きみのみる空は
つながっているから～

名護七曲（１６１）

「考える」

高校の時、歴史の授業で「ギリシャ人は働かずに暮らしていた」と聞き、私も将来はギリシャ人になりたいなあと思ったものです。あれから 40 年ほど経ちます▼当時の高校世界史では、ギリシャ哲学はアテネ（ギリシャ本土）ではなく、小アジア西岸のイオニア植民市から始まりました—と習いました。そして西洋哲学史の教科書で恐らく一番最初に登場するであろう人物がタレス。紀元前 6 世紀頃の人です▼タレスについては後の大哲人アリストテレスが『形而上学』の中で、「タレス先生は万物の第一原理は水だ—と言ってるみたいですよ～」的なことが紹介されています。第一原理は万物の根源みたいなものと考えて差し支えないと思います▼まあ結局万物の第一原因は水ではなかったわけですが、アリストテレスがこうした最初期の哲学者を評価しているのはそこではなく、彼らが世界の始まり（原因）を神々にではなく、あくまでも質量因としての原理にそれを求めたところ。考えてみたら、古代ギリシャという神々にまみれた世界にあって、よくぞそこに着目したなという感じです。確かに凄い▼ミレトス学派に始まり、その後原質論はエレア学派、ヘラクレイトス、またピタゴラス学派や多元論者たち

にまで引き継がれ、やがて哲学はアテネに渡ります。その頃になりますと哲学の関心はポリス社会（国家）の在り方や、アリストテレス以降は特に倫理（人間、いかにして徳を積むか？みたいな）傾向が強くなります▼なぜギリシャだったのか？ 同じような質問をした生徒がいたのですが、その時先生は「知らん。どうせ暇やったんやろう。ギリシャ人は働かんやったからな」と仰ってました。説明によりますと、当時、労働とはそもそも奴隷がするもので、使用者である市民は基本的に働かなくてよかった—とのこと▼「働かなくていい」と聞いて生徒たちが盛り上がりませんがありません。そして口々に「いいなあ～」、「日本もそうやったらいいのに」と沸く生徒たちに、先生の口から鋭利な一言が放たれます。「おまえたちは自分が市民のつもりでそげえ言いようが、みんなおまえ奴隷側ぞ」▼労働は尊いことではありますが、でもあまりに忙し過ぎると物事を考える余裕がなくなります。今では考えることを人工知能に丸投げすることもできます。いったいどんな世の中になるのか、これから先が楽しみではありますが、ちょっと怖いかなとも思います。

（羽柴 禎）

つとかいわ・あれこれ

2, 3 週間前の「日曜美術館」は、坂本美雨が、国連本部に、世界各国から寄贈された「美術品」を訪ねる旅でした。

案内された美術品の一つが、国連・安全保障理事会議室前の、スペインから寄贈されたとされるピカソの「ゲルニカ」のタペストリーでした。

ゲルニカは、1936 年に始まったスペイン内戦の「1937 年 4 月 26 日、ビスカヤ県ゲルニカがドイツ空軍によって『無差別爆撃』を受けた事についての、ピカソの悲しみと怒りが作品になっている」と言われていますし、ピカソ自身もそのように語っています。

「スペインの闘争は、人々に対する、自由に対する反動との闘いです。芸術家として、私の生涯は、反動と芸術の死に対する絶え間ない闘いにほかなりませんでした」と自らを語り、構想され、描かれることになった作品です。

「無差別爆撃」は、世界の戦争の歴史の現実として、中国、重慶に対する日本軍による爆撃が最初で、第2次大戦における英米によるドイツに対し、太平洋戦争末期の日本の...に対する米軍による爆撃も「無差別」でした。エーリッヒ・ケストナーは、「終戦日記」(岩波文庫)で、両親の住むドレスデンに対する爆撃・その無差別爆撃に言及し、両親の安否を気づかっています。

ピカソの「ゲルニカ」になった、スペイン内戦(市民革命とも言われる)については、強く記憶に残っているのが、ジョージ・オウエルの「カタロニア讃歌」(思潮社)です。ずいぶん前に読んでいた本ですが、30 年前の大地震の時、部屋の本棚からすべての本が飛び出してしまった時の片付けで、目にとまった一冊が「カタロニア讃歌」でした。

かつては、全く気付いていなかったのに、その時に目にとまったのが、見開きの箴言 26 章 4, 5 節でした。

それは「...愚かな者にその愚かさに従って答をすな。自分も彼と同じようにならないためだ。愚かな者にその愚かさに従って答をせよ、彼が自分の目に自らを知恵ある者と見ないためだ」となっていました。この箴言の言葉に、自ら共和国軍側に志願し、最前線に立って負傷し、かつそこで敗北して行った共和国軍側の状況、「内部分裂、抗争」が、上記の箴言の引用になったのだと考えられます。かつては、「カタロニア讃歌」を読んでも気が付きもしなかった箴言ですが、大地震の後の再読で見つかつて、なぜか心に迫ってくるものがありました。

ゲルニカのタペストリーがスペインから寄贈され、安全保障理事会議室前に掲示されているのは、世界が戦争、戦争の状況を回避する為の知恵を出し合っ

て欲しい、或いは出し合っていくべき対話を尽くして欲しい願いがあつての事でしょうが、その願いは中心を担うはずの常任理事国によって、踏みにじられてきました。

その最たるものの一つが、パレスチナに対するイスラエルによるさまざまな攻撃について出された異議が、アメリカの拒否権の発動によって踏みにじられてきたことです。

2023 年 10 月 7 日より前も、その後も同じように、そして繰り返し踏みにじられ続けています。

それにしても、今なぜ「ゲルニカ」なのか。

フランチェスカ・アルバネーゼの著作、「世界が眠っているあいだに」は、アルバネーゼの国連での演説の要約の紹介で始まっています。

「...私は初めて本当に憤慨しています。憤慨しているのは無関心です。このジェノサイドの暴力が私たちの日常と意識に入り込んでしまっていて、他者がめっちゃくちゃにされているさなかにそのことでまったく心を動かされない人びとがこの場にいるのです」

「世界が眠っているあいだに」について、

「無関心」について、

「ジェノサイドの暴力」について、

その一方の「私たちの日常」について、

「他者がめっちゃくちゃにされている」ことについて、そのことで「まったく心を動かされない人びと」について、

10 人の人との出会いの「物語」を一言一言つむぐことで、他者の心に届かせる言葉で、歴史的な資料、具体的な事実をあげながら、「憤慨」を国連の場であっても決して値引きすることもしないで、しかし届く言葉が語り続ける物語が「世界が眠っているあいだに」です。

「その物語」の一つが「8 章」にあたる「マラク／どうして人びとの記憶を守ることがそれほど大切なのか」です。アルバネーゼが、パレスチナ・ガザでマラク・マタールとその描いた絵に最初に出会った時、マラクは 15 歳でした。

15 歳だった少女が「絵描き」として歩み始めて「再会」するのは、ガザではなく、ロンドンのセント・マーチンズ・スクール美術研究科に在籍する 2024 年末のロンドンでした。

その時間かされた、マラクの家族のパレスチナ・ガザでの 2023 年 10 月 7 日から後の「悪夢」としか言いようのない避難、そして避難でした。

破壊されたパレスチナ・ガザは、「私が育った街区はほとんど破壊され尽されて、ただ私たちが記憶の中にしか存在しない今では...」ですが、マラクとそ

の言葉に出会ったアルパネーゼは「...マラクが私に語った一つひとつの言葉と息遣いの中に現れ、私が同様に多くの人びとの中に見てきたあの力を、すなわち生きることへの愛を守ることができた。踏みつぶされるがままには決してならなかった」マラク、パレスチナの人たちを見ます。

そのマラクが「絵描き」として求められていると自覚していたのが「ジェノサイドを生き延びている人が、絵画を通じて、同胞が経験しているできごとを表現してくれと自分に求めてくるということ」でした。

で、着想が得られ、取り組んでいたのが「およそ高さ2メートルと幅5メートルの通称『ガザのゲルニカ』と呼ばれる絵画『No Words』でした。

「...壁に描かれたグラフィティはアラビア語と英語で『ガザは永遠に生きる』『ガザはおまえたちを訴える』と叫んでいる。地上には、朽ち果てたままとなっている遺体を食べている動物たちがいる。中央には、気が動転した男が一人、苦痛、衝撃、恥辱の生で口を大きく開け、ロバに乗って駆り立てている。その周りに女性たち、男性たち、子どもたちの遺体とがれきが並ぶ。厳しい詳細な描写が密に詰まった構成で、画面いっぱいに暴力があふれている。住宅、学校、モスク、カルチャーセンター、そのすべてが破壊されている。もはや誰も語りはしないのだ。その作品の中では」

(以上、「世界が眠っているあいだに、マラク／難民にとって故郷はどこにあるのか」より)。

追補：「...マラクの家族の、パレスチナ・ガザでの2023年10月7日から後の『悪夢』について、それをジェノサイドとして、イスラエルのネタニヤフ首相と、ガランツ国防相に「逮捕状」を出したのが、国際刑事裁判所（ICC）です。アメリカ、トランプ大統領はそのICC及び代表を名指しで激しく攻撃しています。そのICC、元裁判官ナヴァネセム・ピレイを、スウェーデンのノーベル賞委員会は、「法の支配に基づく、平和と安定に寄与した」「国家や国家指導者の責任を追及し、暴力や紛争の犠牲者に希望をもたらした」として、ノーベル平和賞を贈ることを決めました。

(K)

日曜日の礼拝説教で、紹介された「国連人権理事会 ガザ・ジェノサイド報告書」（地平社、2026年5月）の中の（228）（229）に、ネタニヤフが、サムエル記上15章3節を引用して、イスラエル兵士らに対し、パレスチナ人の殲滅（せんめつ）を名言したとある。

「行け。アマレクを討ち、アマレクに属するもの

は一切、滅ぼし尽くせ。男も女も、子供も乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも打ち殺せ。容赦してはならない。」新共同聖書より。アマレクとは、パレスチナ人のことであるらしい。

携帯で、「アマレク」「アマレク人」（*1）と、ググってみると、聖書の中で語られるアマレクの悪行が数多く示される。だからといって、現代に於て…。

（*1）アマレク人とは、旧約聖書に登場する、イスラエルと敵対した遊牧系の民族・部族を指す呼び名。

(S)

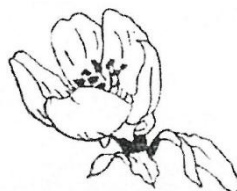
朝晩の空気がひんやりとして、秋が深まってきました。空を見上げると、青空に秋らしい雲が広がり、気持ちのいい風が吹いています。そして秋は、おいしいものが次々と届く、うれしい季節。丹波篠山市後川の新米に、もうすぐ届く黒大豆枝豆。「今年はどんな味かな」と、楽しみにしています。

先日の子どもたちとのさつまいも掘りでは、土の中から顔をのぞかせたさつまいもに、みんな夢中になりました。つるにつながつて、ぼろぼろと出てくるおいも。「まだあるかな」「こっちにも!」と、ひとつ見つかると、なかなか手を止められません。土の中を探る楽しさは、子どもたちも大人も同じです。

この日のおやつは、畑に炊飯器を持ち込んで、炊き立ての新米でした。さつまいものきんぴらと、畑で採れたしその実で作ったしそ味噌を添えて、いただきます。炊きたてのご飯にしそ味噌をのせると、つついもうひと口。土に触れたあと、青空の下でみんなと食べるご飯は、格別でした。外で食べると、一段と美味しかった!こうして、子どもたちと一緒に過ごせるのも、保護者の方々の協力、理解があったることと感謝いたします。

おいしいものを囲むと、自然と話が弾みます。「おいしいね」と言い合うだけでも、なんだかうれしくなります。本を読んで「おもしろかったね」と話す時間にも、どこか似ている気がします。公同ぶんどでも、一冊の本をきっかけに、おしゃべりしたり、笑ったり。そんなひとときを、これからも、みんなと一緒に楽しんでいけたらうれしいです。

(K)



かりん